

# 明治村 だより

1998 Autumn



秋号  
Vol.13



## 目次

|                  |         |    |
|------------------|---------|----|
| 明治大正の大衆芸能について    | 倉田喜弘    | 2  |
| 成長する明治村の森        |         | 7  |
| 明治村の蔵書について       |         | 10 |
| 館蔵資料紹介(へ)        |         | 12 |
| 売葉業と売葉版面について     |         | 12 |
| 明治村写真コンテスト入賞作品紹介 |         | 13 |
| 秋の明治村            |         | 14 |
| 表紙写真「秋彩の聖ヨハネ教会堂」 | 撮影 丹羽明仁 |    |

『明治村だより』  
第十四号(平成十年初春)発行のお知らせ  
発行時期 平成十年十二月(予定)  
申込方法 『明治村だより』第十四号ご希望の旨、ご住所・お名前を明記の上、送料一四〇円分の切手とともに封書にてお申し込み下さい。

平成十年九月十六日発行  
『明治村だより』第十三号(平成十年秋)  
発行 博物館明治村  
愛知県犬山市内山一丁目  
電話(〇五八八)六七〇三三四 千四八四一〇〇〇  
ホームページ <http://www.meitetsu.co.jp/meiji-vil/>  
製作 大日本印刷株式会社





# 成長する明治村の森

## 序

明治村は森に包まれています。二十メートルを越そうという高木から、膝の高さに刈り込まれたツツジやサツキの類まで、ざっと数えても七十種ほどの樹木に覆われています。

明治村の一年をざっと描いてみましょう。もうすぐ秋風が心地よくなってくると、カエ



写真1

デの類を筆頭に、すべての葉が美しく色付いてきます。春、一面をピンクや白に埋めつくして

いたアメリカハナミズキの紅葉も芽えてきます。苑路ぎわから離れた山林も様々な色に染まりま

す。それと同時に、コナラの下にはたくさん

石が転がるような美しさです。時が経ち、トンネルやドームの色が濃くなるにつれ、それまで林の向こうに見えていた建物が再び隠れてしまいます。森が蟬の声でいっぱいになる真夏、森の中はアスファルト道路の気温より数度は低い快適な空間になります。森の中には風が生まれるようです。

## 起

明治村を発足させた三十年前に意図したことがあります。全国から移築した建物はそれぞれにその地方の顔や雰囲気を持っていきます。移築の都合で隣同志に並べたとして、特徴を消し合

その頃の航空写真が残っています。(写真1 昭和41年6月) 苑路がはっきりと見え、地図に樹木の修景を書き込んだ絵のように見えます。木々が低く、薄かったせいですが、それに対して近年撮影された航空写真では、苑路が見えなくなってきました。三十年の歳月の間に、苑路を隠すほどに樹木が育ったためです。アカマツではありません。コナラ、クヌギなどの落葉広葉樹です。

承

アカマツが弱ってきたかといいますが、確かに弱ってきました。全国的な松喰虫の被害状況



写真2-1 昭和50年頃までは、正門の上にアカマツ林に囲まれた聖ヨハネ教会堂が望まれた。



写真2-2 現在、アカマツ林は高いコナラ材に代り、聖ヨハネ教会堂はわずかに塔屋がのぞくのみ。

ではありませんが、明治村でも過去二十年くらいに互って、松喰虫の被害を食い止めるための薬剤散布、被害マツの伐採を続けていて、少しずつその被害は減ってきています。が、マツそのものの強さは下がって来ているように感じられます。それは、マツよりもずっと成長の早い落葉広葉樹との戦いのせいでしょう。その戦いを助長してきたものは意外にも人間だったのではないかと考えています。植物が成長するためには葉緑素の部分で光合成を行います。光合成に必要なものは、太陽の光と水と炭酸ガスです。明治村を訪れた多くのお客さまたちの吐出した炭酸ガスが、落葉広葉樹の成長を早め、マツを日陰に押しやり、弱らせてゆくようです。

でも、これは悲しむべき事態なのか、自然の営みとして当然のことなのか、考えてみる価値はありそうです。

転

樹木には、日当たりを好む樹木と、日陰でも強い樹木があります。アカマツは日当たり向きで、乾燥にもよく耐える強い木です。栄養のよくない乾燥した山地や岩肌に生育します。しかし、日陰となると減法弱く、新しい芽生えも生まれません。そのため、アカマツだけの林は、先輩のマツが日陰を作ってしまうと、次の世代は育ちにくくなります。もちろん、他の樹木に地面を覆われても、新しい芽生えはなく、人がいろいろと手を貸さないかぎり「一世代限りの樹木」となってしまいます。では、次に育つ樹木は何かといえば、コナラやクヌギなどの落葉広葉樹なのです。これらの木はマツなどが作り出す木陰でも芽生えをし、どんどんと成長、ついには先輩のマツを凌駕して、一群の林を形成するのです。その木陰ではさらに次のコナラも成長してゆきます。林の中には別の樹木も育ちます。常緑広葉樹がコナラ、クヌギの木陰で時間をかけて成長し、やがて、林全体が常緑広葉樹を主とする照葉樹林といわれる林になってゆくのです。この変化が林や森の自然の流れです。では、ここに明治村が置かれる以前、なぜアカ



写真3-1 昭和51年冬、SL北の山から遙か六聯隊兵舎まで、視界をさえぎる高木はない。



写真3-2 現在、同じ地点に立つと、林に囲まれた別世界となっている。

生実験をしたのかも知れません。

結の予測

マツだけの林であったのか。それは日本の燃料事情などによるといいます。昔、主要な燃料は木材でした。農家をはじめとする地域の人々は、近くの山を入会地として、細い薪を求めて、林の樹木を定期的に伐りだしていました。マツの下に芽生えた各種樹木の若木はもとより、マツも燃料として伐採しました。ですから、山はいつまでたつても日当たりの良い、栄養価の低い土壌で、アカマツしか生育しない土地だったのです。三、四十年前の日本の山の写真、どれを見ても禿げ山が多く、土壌が肥沃ではなかったことを示しています。

明治村は文化財建造物を移築して保存してきました。その一方で、三十年間木々に手を掛けた

二十一世紀を迎えようとしている現代、日本中の林からアカマツが減少してゆきます。燃料事情が変化し、森が森本来の生育環境に置かれているからとも言えます。

しかし、マツが完全に無くなると思えません。海岸べりの厳しい環境ではマツしか育たないの

補遺

最後に、明治村の森に育つ樹木の名前をざっと挙げてみましょう。そのほとんどが、鳥に好かれる木です。美しい森と長年あがれていた上野公園を十年ぶりに訪れ、失望した。大きくはなったが、汚くなっていった。明治村の森、あのように、したくないと切実に思う。

博物館明治村では村内に自生する樹木の多くが鳥の好む木であることに鑑み、来春たくさんさんの巣箱を取り付けようと計画しています。準備が出来た段階で、遠足の児童生徒さんたちに手伝っていただいで、取り付けることにします。

西尾雅敏(当館建造物担当部長)

# 「明治村の蔵書について」



図① 開村式にて 右 徳川村長 左 谷口館長

明治村は野外博物館として明治・大正時代の建物を移築保存している博物館であるが、建物ばかりでなくこの時代に関するあらゆる分野の資料をも収集している。また蔵書に関しては、明治・大正時代をよりよく知るために鋭意収集した書籍をはじめ各方面から一括寄贈された書籍も所蔵している。これらの蔵書は、今までは内部の参考図書として利用しているだけであるが、順次整理を行って将来この一部を一般来村者に公開することを考えている。

近頃、従来の図書館施設に加え、各地の博物館・美術館でも館内に図書室や図書館を設けて入館者へのサービス活動を行っていると、ところが増えてきたようである。基本的にあらゆる分野の書籍をまんべんなく所蔵する一般図書館とは違って、それぞれの博物館の特徴を全面に押し出して独自の選定のもとに書籍を収集している。入館者は、展示品を見て興味を深められると同じ主題の参考図書を読んでさらに知識を得る、

もしくはその反対に、参考図書によって展示品を見る眼が養われるというふうな理想的な相乗効果が期待されるであろう。

当館の場合も、例えば明治時代に使われた生活用品など今では全く見られなくなったものも多く、こうしたものがどのように使われていたかを詳しく解説する必要性に迫られることがある。展示品の傍らには題箋と称する解説を付けるのであるが、通常は内容を最小限に収めざるを得ない。こうした場合、より詳しく知りたい入館者に有用な参考図書を提供できればさらに理解を深めてもらえるであろうと思われる。

当館の蔵書は、大別すると館独自で収集（寄贈も含む）した書籍約一万冊と、一括寄贈を受けている書籍約二万五千冊とがある。当館で収集した参考図書は、展示建造物にちなんだ主題を中心に明治・大正・昭和の時代を通して多分野にわたるが、なかでも歴史が一番多く、ついで政治経済・芸術・建築などである。明治文化

全般を広く理解するために今後も有益な書籍を収集する方針である。

また、一括寄贈された書籍については全部で五種類あり、それぞれ整理が完了もしくはは継続中である。

今回はその中から、明治村の初代村長である徳川夢声氏旧蔵書と二代目館長である関野克氏からの寄贈書についてその概要を紹介したいと思う。

徳川夢声氏（明治二十七年～昭和四十六年）は島根県生まれ、本名福原駿雄。最初落語家をめざしたが家族の反対にあい活動写真の弁士となる。その軽妙な語り口で名解説者として知られたが、まもなくトーキー時代に入って失業すると、俳優、漫談等で幅広く活躍し、ラジオの朗読、テレビ司会なども手掛け、随筆なども多く著わしている。

夢声氏が初代村長に推されたのは、同じ大山市にある財団法人日本モンキーセンターの役員をしていたという縁に依るものである。昭和四十年三月十八日、明治村開村式で夢声氏は、山高帽子に五つ紋の羽織袴姿の正装でテーブカットを行ない、人力車に乗って村内をパレードした。

（図①）  
夢声氏の旧蔵書は、氏の死後ご遺族の厚意により寄贈いただいたもので約四千二百冊ほどある。内容は随筆や文学全集が半数を占めているが、仕事に関連した落語・講談並びに芝居や演

劇、映画関係のものも多く含まれている。（図②）

また俳句を趣味としていたためかこの分野の書籍も比較的多い。その他美術や自然科学の分野まで実に幅広く収集されている。また昭和二十年代から四十年代に書かれた著書も何冊か入っており、自伝や対談集、多彩な人間関係を示す交友録などが大変興味深い。

二代館長関野克氏（明治四十二年～）は東京都出身、建築史家関野貞氏の子息として生まれ、東京大学工学部建築学科及び大学院を卒業後、永く母校で教鞭を執られた。また教授を併任して文化財保護委員会事務局建造物課長を勤め、建築学を中心とした文化財保護行政の分野で活躍された。その後東京国立文化財研究所の所長を経て昭和五十三年、初代館長谷口吉郎死去の跡を引き継いで二代目館長に就任、平成三年までの十二年間当館の発展のために尽力された。現在は一線を退かれているが、その夥しい蔵書

を有効に活用したいとの意向でその一部を当館に寄贈された次第である。

関野氏からの寄贈書は約二千五百冊ほどあり、内容は専門である建築史関係が最も多く、ついで美術関係のものでその大半を占めている。また法隆寺金堂・平等院鳳凰堂・姫路城・日光東照宮・中尊寺金色堂などの大修理を管理指導した関係で、これらに関する書籍が多く含まれているのもうなづけよう。（図③）

いずれも特色ある内容の寄贈書なので、興味を持たれる方も多いのではないかとと思われる。急速な変化をとげる時代の要請に合わせて、博物館もまたさまざまな教育普及活動を試みなければならぬ風潮である。その一環として蔵書公開というかたちも、入館者の知的欲求に応えるためのひとつの方法と考えられる。

遠藤照子（当館学芸員）



図② 坪内士行著「西洋土居土産」



図③ 「法隆寺の至寶」

## 館蔵資料紹介(二) 売薬業と売薬版画について

はじめに

売薬版画とは江戸時代から昭和初期まで、売薬行商人が全国の得意先へ、薬のおまけとして配った木版画のことで、売薬業の盛んであった富山県で作られたものです。

売薬業における「おまけ」としての性格上、一般的な浮世絵とはまた違った特徴をもっています。

### 売薬業のはじまり

元禄三年(一六九〇年)、江戸城に富山藩二代藩主前田正甫が参勤した折、急な腹痛を訴えた大名に持参の薬を飲ませたところ、すぐに痛みが治まりました。この薬は秘伝の「反魂丹」で、その場に居合わせた他の大名たちが、ぜひ自分の藩にも頒けて欲しいとの話から富山の売薬業がはじまったとされています。

自由な旅もままならなかった時代に、他藩へも自由に通行できるいわゆる「他領商売勝手」というこの富山藩の後ろ盾により、売薬業は一躍発展を遂げ、越中富山の薬売りは全国的に有名になりました。

この薬売りの商法は「先用後利」「配置薬」といって、商品は先渡しで代金は使った分だけ後払いといういわばクレジット販売でした。



大賞 メインストリート 奥野喜久雄

明治村写真コンテストは、入場者の方に明治村についてより深く興味を持っていただくために企画したもので、村内の変化のある四季の情景や、催事風景などを撮影して応募いただき、厳正な審査のもと入選者を決定しています。

このコンテストは、昭和五十七年からはじまり、もう十数年にわたって続いている恒例の催事です。以前は春と秋に期間を限定して行っていました。現在は一年を通じて、すべての季節をあらゆる角度から撮影していただくため、通年募集としています。感じたままを新鮮な目で写した応募作品は、思い切ったアングルや斬新な表現も見られ、またプロのカメラマンの作品とは一味違うようです。これらの入賞作品を中心に、明治村のカレンダーも製作しています。

平成九年度写真コンテストは、六月末日で締切、応募総数三百七十点を数え、七月二十二日に審査を行い、大賞一点、特選一点、入選十一点、佳作二十点が決定しました。

売薬行商人「売薬さんは「懸場帳」とよばれる、得意先やそれぞれの集金高などが記録されている帳面に基づき新しい売を補充したり、代金の回収のために年に一度全国の村々を回りました。現在のよう

### 「おまけ」版画について

売薬さんの持つ「おまけ」版画の画題は、芝居絵の他、火の用心、切離して使える熨斗絵等実用的なものもあり、また版画のほかには、立山参拝への案内、塗箸、手拭い、氷見の縫針など富山の産物が用いられました。

売薬版画は一般にいわれる浮世絵とちがって、「おまけ」として無料で配る目的で作られています。また、運搬の便を考えて「安価で持ち運びに便利」な形状ということで、細判といわれる30cm×13cmの大きさが一般的でした。古い売薬版画には江戸の絵師の手によるものもありますが、明治前期には富山の絵師、松浦守実による中判、細判といわれる版画が大半をしめます。

明治の中頃には、日清・日露戦争も画題となり、娯楽的なそれまでの芝居絵や名所絵等とともに、時事情報も庶民にもたらされました。

版画の色刷りには、ちょうどこの頃輸入された安価なアニリン染料が大量に使われ、赤、紫が主体の



源平盛衰記 尾竹国一画 明治後期  
千代萩床下之図 尾竹国一画 明治中期

刷りとなってきますが、これも売薬版画の一つの特徴であるといえます。

しかし明治二十年代前半に導入された石版印刷技法により、木版と違って大量印刷が可能になると、他の娯楽や印刷物が普及しはじめました。

大正時代に入るとこのような「おまけ」の版画に娯楽性を求めることも少なくなり、子供の喜ぶ紙風船などが配られはじめ、この特色ある売薬版画も姿を消してゆきました。

### 主な参考文献

- 根塚伊三松 『日本海カラーブックス07売薬版画 おまけ絵紙の魅力』 一九七九
- 富山県印刷工業組合 『富山県印刷史』 一九八一
- 坂井誠一 『県史シリーズ16富山県の歴史』 一九七〇
- 高瀬 保編 『図説日本の歴史16図説富山県の歴史』 一九九三

大北八千代(当館学芸員)

## 明治村写真コンテスト 入賞作品発表



特選 心新たに 中村トキ子

### 入選作品 (敬称略)

水のカーテン(舟橋哲也)、夏の宵(夏目修)、鉄橋のある風景(渡辺学)、幼女の祈り(小林喜代春)、遠望(小川原耕司)、朝の光(佐藤哲雄)、しだれ桜(藤原千弘)、秋の宗教大学車寄(水野憲章)、新緑の頃(斎藤由理)、明治から来た人々(荒田玲子)

### 佳作作品 (敬称略)

明治のSL(藤岡治行)、春満開(及川理英子)、京都市電(武田隆雄)、晩秋の金沢監獄中央看守所監房(渡辺昌昭)、秋色の窓辺(今泉今朝雄)、祝福(小栗守)、新緑印象(太田英作)、誓願(西部信行)、花は満開(植田真三)、



特選 雪柳咲く 高田小熊写真館 西川義博

ひととき(酒井達哉)、聖なる光(寺澤英治)、菅島燈台付風官舎と品川燈台(深井八四男)、春のきざし(岡田恵美子)、明治村学舎(甲村道夫)、新緑の学習院長官舎(阿部洋士)、花の学習院長官舎(稲垣量)、明治村の正月で(川出要)、明治の面影(吉田清英)、夏の思い出(村木誠一)、小雨の呉服屋前(伊藤武)

☆平成十年度明治村写真コンテストで作品を募集しています。募集期間平成十年七月〜平成十一年六月。詳しくは博物館明治村「写真コンテスト」係までお問い合わせください。



秋、あのシーンをもう一度。

9月12日(土)～11月23日(祝)

芸術の秋—古き良き時代の大衆芸能を鑑賞—

- ◇ 「いにしえ映画祭」(ビデオシアター)

思い出深い不朽の名作を上映します。

呉服座公演日を除く毎日開催  
呉服座

- ◇ 「呉服座公演」

10月10日(祝) 片山子供歌舞伎(愛知県新城市)

11月3日(祝) 福岡町歌舞伎保存会 子供の部(岐阜県恵那郡)

呉服座

祭りの秋—華やかな衣裳で変身—

- ◇ 「ハイカラパレード」

日祝日10:30～、13:30～

三重県尋常師範学校・蔵持小学校受付

- ◇ 「ハイカラ写真館」 皇室警察署別館

「カクテルドレスで記念撮影」 帝国ホテル中央玄関

文化の秋—体験を通して明治を学ぶ—

- ◇ 「日曜講座 明治建築種明かし」

9月のテーマ: 風と建物

10月のテーマ: 建物を飾る花

11月のテーマ: リクエスト

第2・4日、祝 11:15～11:45

第四高等学校物理化学教室

- ◇ 「折り紙建築教室」

第2・4日 三重県庁舎

- ◇ 「たてものものしりツアー」

第2・4土曜

10:30 正門スタート 所要時間 約1時間

- ◇ 「たてものもっと知り隊」

ミュージアムショップ受付

- ◇ 「日本庭園で野点を」

日祝日 日本庭園

記念日イベント

- ◇ 「SL重運運転」  
— 鉄道の日(10月14日)にちなんで —  
10月10日(祝)、11日(日)

- ◇ 「鉄道模型を走らせよう」

10月10日(祝) から毎日 名鉄岩倉変電所

- ◇ 「品川燈台公開」

— 灯台の日(11月1日)にちなんで —

10月31日(土)、11月1日(日)、3日(祝)

食欲の秋—秋の味覚を味わう—

- ◇ 「秋の体験料理」 土・日・祝 坐漁荘

- ◇ 「秋づくしの料理セミナー」

9月27日(日)、10月25日(日)、11月22日(日)

三重県庁舎

- ◇ 「和菓子作り教室」

9月20日(日)、10月4日(日)、18日(日)

11月1日(日)

三重県庁舎

